

神の愛を伝える言葉：ルカによる福音書における 譬えの修辭的・神学的機能

原 口 尚 彰*

抄 録

ルカ福音書においてイエスの譬え話はしばしば聴き手への問いによって始っている（ルカ 11:5; 12:25, 36; 13:18, 19, 20; 14:4; 15:4 他）。これらの句は修辭的疑問文であり、聴き手の注意を引くと共に、譬えられていることが彼ら自身に関わることであることを認識させようとしている。

福音書記者ルカは譬え話の登場人物の感情を描くことによって聴衆に訴えようとする傾向が強い。例えば、「失われた羊の譬え話」では、羊を見つけた羊飼いの喜びが描かれ（15:5-6）、「なくした硬貨の譬え話」では、なくした硬貨を見つけた女性の喜びが描かれている（15:8-9）。

ルカ福音書に出て来る譬え話には、隣人愛の本質を示す「善いサマリヤ人の譬え話」（ルカ 10:30-37）のように仮構のストーリーを通してキリスト教の理念を表現する例話が含まれている（ルカ 10:30-37; 12:6-21; 16:19-31; 18:9-14）。

Keywords: 譬え話、イエス、ルカ、問い、例話

1. はじめに

ルカ福音書の物語には多くの譬えや譬え話が出て来る。その一部はマルコ資料や（ルカ 8:5-8=マコ 4:3-9; ルカ 8:16-18=マコ 4:21-25 他）、Q 資料から（ルカ 14:15-24=マタ 22:1-10; ルカ 15:4-7=マタ 18:12-14; ルカ 19:11-27=マタ 25:14-18 他）採用したものであるが、ルカ特殊資料に由来するもの

も多く（ルカ 1:78-79; 2:32; 10:30-37; 13:6-9; 14:25-33; 15:8-10; 15:11-32; 16:1-8; 16:19-31; 18:1-8; 18:9-14）、他には見られないルカ特有の傾向を示している¹。本論考はルカ福音書に用いられている譬えや譬え話の修辭学的・神学的考察である。特に、Q 資料やルカ特殊資料に由来する譬えや譬え話の特色を明らかにした上で、それぞれの持つ修辭学的機能と神学的特色について考察する。最後にまとめとして、ルカ福音書全体の中で譬えや譬え話を通して語ることが持つ修辭的・神学的意義について考察する。

* Haraguchi, Takaaki
日本ルーテル神学校講師

2. ルカ福音書における譬え

譬えについての理論的考察は先に書いた論文の中で行ったので、ここでは最小限のことを確認するに留める²。譬えはあることを異なった事柄になぞらえる文学形式である³。譬えは聞く者の理解を助けると共に、メッセージを強く印象付け、記憶を助ける効果を狙っている（マコ 4:33-34）⁴。また、修辭的機能からすると譬えは連想によって新たな意味を創り出して新しい現実認識をもたらす手段である⁵。譬えは比喩やメタファーとして短い諺や成句の形（狭義の「譬え」）でも、物語性を備えた説話（「譬え話」）の形で用いることが出来る。

譬えや譬え話は、ルカ福音書においては、パラボレー（*παραβολή*）と呼ばれる（ルカ 4:23; 5:36; 6:39; 8:4, 9, 10, 11; 12:16; 13:6; 14:7; 15:3; 18:1, 9; 19:11; 20:9, 19; 21:29）⁶。パラボレーはあることを異なった事柄に譬える文学形式であり、未知のことを既知のものに対比し、不可視的なことを可視的なことに置き換えて修辭的効果を挙げることを目的とする。ルカ福音書は形容詞 *ὁμοίος* を使用する *ὁμοίος* (*ὁμοία*) *ἐστίν*・・・（「・・・のようなものである」）という句や（ルカ 6:48, 49; 7:31, 32; 12:36; 13:18, 19, 21）、動詞 *ὁμοίωω* を使用する *τίνι ὁμοιώσω*（「何に譬えようか？」）という句で（7:31; 13:18, 20）譬え話を導入することが多い⁷。このことは福音書記者ルカが譬えという文学形式の本質を比較と類似であると理解して、物語記述の中に積極的に用いていることを示している。

2.1 詩文中の譬え

ルカ福音書冒頭の降誕物語の叙述部分には、神を畏れるイスラエル人の預言や讚美の歌が記されている（ルカ 1:68-79「ザカリアの預言」；2:29-32「シメオンの讚歌」）。預言や讚歌は旧約時代より韻文でなされるのが伝統であり、降誕物語に出て来る預言や讚歌も韻律を持った詩文となっている。メタファーは詩文に親和性がある文学表現であるとされる（アリストテレス『詩学』1457a-

1459;『弁論術』1406bを参照）。これらの詩文の中には幼子イエスの存在をメタフォリカルな内容を持つ譬えを用いて表現している部分がある。「ザカリアの預言」（1:67-79）において洗礼者の父ザカリアは、ヨハネの誕生に際して神を称えつつ、救い主誕生の預言を行っている。その内容は来たるべき救い主の誕生を予告する預言であり、メシアであるイエスの到来と（1:68-69, 78-79）、到来の準備をする洗礼者の務めについて語っている（1:76-77）。この預言によれば、到来するイエスは「救いの角」（1:69）であり（詩 18[17]:3; 89[88]:17; 132[131]:17; 148[147]:14; エゼ 29:21を参照）、「高いところからの曙光」として、「暗闇と死の陰に座する者たちを照らし、私たちの道を平和へ導く」（1:78b-79）こととなる（イザ 9:1; 60:1, 19を参照）。これらのメタファーは旧約聖書の詩編や預言書に見られるメシア預言の比喩的表現を借用しながら、イエス・キリストの到来の意味を告げている⁸。

「シメオンの讚歌」（ルカ 2:29-32）では、エルサレムの神殿にイエスが両親に連れて来るのを見て、シメオンが神を讚える讚美の歌を歌う。その中で彼は幼子イエスを「諸国民への啓示の光」と呼ぶ（2:32）。この句はイザヤの僕の歌に出て来る「諸国民の光」（イザ 42:6; 49:6; 60:1-3）という表現をもとに作り出した詩的メタファーである⁹。

2.2 洗礼者とイエスの譬え

2.2.1 洗礼者が用いる譬え

ルカ福音書では洗礼者ヨハネも譬えを用いて人々に語り掛けている。ルカ 3:7-9において、洗礼者は説教の中で、「蝮の子ら」（3:7）、「悔い改めに相応しい実を結べ」（3:8）、「斧が木の根元に置かれている」「切り倒されて火に投げ込まれる」（3:9）等の譬えを用いている。この箇所にはマタイに非常に似た並行箇所があるので（マタ 3:7-11を参照）、Q資料に由来する語録であることは明らかである¹⁰。「蝮の子ら」（ルカ 3:7）は洗礼を受けようとしてやって来たユダヤ人民衆を指して用いられている。「悔い改めに相応しい実を結ぶ」

こととは (3:8)、罪を告白して洗礼を受けた者が、悔い改めに相応しい倫理的振る舞いをするを指しており (ロマ 6:22; ガラ 5:22 を参照)、その具体的内容は 3:12-13 にある洗礼者の言葉の中に例示されている。倫理的振る舞いを結実に譬えることは、詩編や (詩 1:3)、エレミヤ書や (エレ 17:7-8)、シラ書 (シラ 6:3) に見られ、ユダヤ人聴衆には身近な文学表現であった¹¹。「斧が根元に置かれている。良い実を結ばない木は切り倒されて火に投げ込まれる」(ルカ 3:9) という譬えも Q 資料に由来するが (マタ 3:10)、譬えが終末の裁きをリアルに描く効果を持っており (詩 74[73]:6; イザ 10:33-34 を参照)、洗礼者が裁きの接近を説いて民に悔い改めを勧める預言者であることを示している¹²。

「脱穀と焼却の譬え」(ルカ 3:17) も Q 資料に由来する (マタ 3:12 を参照)¹³。「脱穀」は旧約聖書において預言者たちが裁きの象徴として用いている (イザ 41:15-16; ミカ 4:12-13)。「火」は旧約聖書においても (イザ 10:16-19; 66:24; ナホ 1:6; ゼファ 1:18; マラ 3:19)、新約聖書においても (マタ 5:22; 7:19; マコ 9:22, 43, 44; ルカ 3:9; 12:49; 17:29; 黙 20:9, 10, 14, 15 他)、裁きの象徴として用いられている。従って、穀物を収穫した後、脱穀し、残った糊殻を火にくべるのが、終末の裁きを象徴することは、ヨハネの説教を聞いた聴衆にも福音書の読者にも明らかであった¹⁴。

2.2.2 イエスが用いる譬え

ルカ福音書において、イエスは他の福音書にも増して譬えを用いて語っている。ルカ 4:23 において、イエスはナザレの会堂説教において会衆に対して、「あなた方は必ず私に、『医者よ、自分自身を癒やしなさい』という諺を語って、『カファルナウムで行ったと聞いていることをすべて、ここ、あなたの故郷でも行いなさい』と言うであろう」と告げている。この言葉はイエスの説教に感嘆したものの、説教者が良く知っている「ヨセフの子」であったので、イエスを受け入れることをためらっている会衆の心中を押し量って先取りの

に語られている (マコ 6:3 を参照)。「医者よ、自分自身を癒やしなさい」という言葉は他の共観福音書には見られないが、トマス福音書に並行伝承が伝えられている (トマ福 31)。ルカ福音書はこの言葉をパラボレー (παραβολή) と呼んでいる。名詞 παραβολή は「譬え」と共に「諺」という意味も持っており、この言葉が人口に膾炙した諺であったことを示唆している¹⁵。この語録は元々は医者信頼性を問題にした言葉であると考えられる。自分自身の病を癒すことが出来ない医者は、他人の病気を診断し、治す能力を持っているかどうか疑わしいからである¹⁶。

イエスは他の機会に、罪人を招き回心させる自らの宣教の業を病人を治療する医者の仕事に譬えている (マコ 2:17; ルカ 5:30)。これに対して、今回のイエスの言葉によるとナザレの村人たちは、諺が言及する医者自己治療活動を、宣教者が奇跡を行って身近な故郷の人々を癒やすことの譬えと解釈し、イエスに奇跡を行うことを心の中で求めていた。尚、ルカ福音書によるとイエスは直後の 24 節で、「預言者はその郷里で歓迎されることはない」という格言を引用しており、イエスを受け入れようとしないナザレの人々の態度を、郷里における預言者拒否の伝統に結び付けて非難している (マコ 6:4; トマ福 31 も参照)。イエスは郷里で人々の期待に応じて癒しの奇跡を行うことを、旧約時代の預言者エリヤやエリシャの例を引きながら断固拒否したので、人々は激高することになる (ルカ 4:25-29)。

ルカ福音書 6 章の平野の説教には譬えが次々に出て来る。最初に出て来る「盲人の道案内の譬え」(ルカ 6:39) はマタ 15:14 に並行箇所があり、Q 資料に由来する (トマ福 34 も参照)¹⁷。ルカ福音書はこの言葉を譬え (παραβολή) と認識し、読者にそう告げている (ルカ 6:39 を参照)。この譬えの「盲人が道案内になることが出来るのだろうか? 二人とも穴に落ちるのではないだろうか?」という文言には欠落があり、マタ 15:14 では、「盲人が盲人の道案内をすれば」という仮定文が、二つの修辭的疑問文の間に挿入されている。この譬

えでは、視覚障害が真理に関する盲目性を象徴しており（プラトン『国家』6.506c; 7.518c; クセノフォン『ソクラテスの思い出』1.3.4; イザ 6:10; 29:9; 42:18; ヨハ 9:39-41 を参照）、弟子たちに対して真理に対して目を開いて正しい認識を持つことの大切さを強調している¹⁸。この譬えはマタイ福音書ではユダヤ教の指導者批判の文脈で用いられ（マタ 15:4; 23:16, 24）、真理を知らずに人々を導いている指導者へのアイロニーをこめた発言となっている¹⁹。

「目の中の塵と梁の譬え」（6:41-42）はマタ 7:3-5 に並行箇所があり、Q 資料に由来する（トマ福 26 に並行伝承が見られる）²⁰。この譬えは、「目の中の梁」という誇張した表現を用いて、人間が自分自身の過ちに気付きにくい傾向をユーモラスに描いている²¹。この譬えは、自分自身を十分に振り返らずに、他人を裁く偽善的な傾向を戒める倫理的勧告である²²。

「良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ譬え」（ルカ 6:43）は Q 資料から採られており、マタ 7:18 と 12:33 に並行箇所がある²³。木の種類によって付ける実が定まっており、特定の種類の木が違う種類の木の実を結ぶことがないことは、自然世界の観察から得られる法則としてギリシア・ローマ世界の格言にも言及されるし（エピクテトス『提要』2.20.18-20; プルタルコス『モラリア』472F）、ヤコ 3:12 にも警告の言葉として引用されている²⁴。しかし、この Q 資料の譬えはむしろ倫理的行動を結実に譬える旧約聖書の知恵文学の伝統を踏まえており（詩 1:3; イザ 3:10; エレ 17:10 を参照）、ユダヤ人聴衆に対して善い行いを生み出す良い存在になるように勧めている²⁵。ルカはこの譬えの後に、「木はそれぞれ結ぶ実によって分かる」という格言を置いた後に（ルカ 6:44; さらに、マタ 7:16 を参照）、「善い人は良いものを入れた心の倉から良いものを取り出し、悪い人は悪いものを入れた倉から悪いものを取り出す」と述べている（ルカ 6:45; さらに、マタ 12:35 を参照）。マタイが人間の倫理性の表れである振る舞いを本物の預言者と偽預言者を見分ける基準

に転用しているのに対して（マタ 7:15-16）、ルカは Q 原本に従って、心の在り方と振る舞いの相関関係を強調して、善い業を生み出す善い心を持つ存在となるように勧めている²⁶。

「岩の上に家を建てる譬え」も（ルカ 6:47-49）、Q 資料に由来する（マタ 7:24-27 を参照）²⁷。この譬えは岩の上に家を建てる者（ルカ 6:47）と、土台を据えることなしに家を建てる者（6:49）とを対照している。これに対して、マタイ版の話では、岩の上に家を建てる賢い者と（マタ 7:24）、砂の上に家を建てる愚かな者（7:26）とが対照されている。マタイ版は賢くなることを勧める知恵文学的な発想によって、Q 原本を書き換えているのであろう。譬えの初め（ルカ 6:47）と終わり（6:49）に置かれた句がこの譬えの意味を解説しており、二人の人物像はイエスの教えを聞いて実践する者と聞いても実践しない者を象徴している。この譬えは平野の説教（ルカ 6:20-49）の結びに位置しており、説教を聞いた者に聞いたことを実践するように促している²⁸。

「広場で遊ぶ子供たちの譬え」も（ルカ 7:31-32）、Q 資料に由来する（マタ 11:16-19 を参照）²⁹。この言葉は導入句の文言が示すようにルカによって譬えと認識されている³⁰。冒頭に置かれているルカ 7:31-32 は、修辭的疑問文（7:31「この世代の者たちを誰に比べようか？彼らは誰に似ているのであろうか？」）とそれに対する答え（7:32ab「彼らは広場に座って互いに呼び合う子供たちに似ている」）からなっている（イザ 40:18-19; ルカ 13:18-19; 13:20-21 を参照）。それに続く、「僕らは君たちに笛を吹いたのに君たちは踊ってくれず、哀歌を歌ったのに、君たちは泣かなかった」という子供たちの言葉は（7:32cd）、メタフォリカルな性格を持っており、洗礼者やイエスの宣教の言葉を聞いても応答しない人々を念頭に置いて非難している³¹。譬えに付加された解釈句の 7:33b-34 は譬えが、人々が洗礼者やイエスを受け入れないことに言及していることを確認し、7:35 は知恵に関する格言を引用して洗礼者やイエスの宣教の正当性を強調している³²。

「灯火の譬え」(ルカ 8:16-18) は基本的にはマルコ原本に依拠しているが(マコ 4:21-25)、「秤の譬え」(マコ 4:24)の部分は省略している³³。ルカは恐らくこの部分は主題的に異質であり、削除した方が一貫した記述になると考えたのであろう。灯火は燭台の上に置いて部屋を照らすためにあるものであり、器で隠したり、寝台の下のように見えないところに置くものではない(ルカ 8:16; さらに、マコ 4:21を参照)。この譬えにおける灯火は真理を伝える福音の言葉の象徴であり、それは自ずと明らかになり、隠すことは出来ない(ルカ 8:17; 12:2)³⁴。

「刈り入れの譬え」(ルカ 10:2)には、マタ 9:37-38に並行箇所があり、Q資料に由来する³⁵。ルカはこの譬えをイエスが弟子たちに語った宣教派遣の説教の冒頭に置いている(10:2-16)。譬えの前半(10:2a)は宣教者を意味する「働き人(ἐργάτης)」が少ないと主張し、後半(10:2b)は「刈り入れの主」である神により多くの宣教者の派遣を求める祈りの勧めとなっている。鎌を入れる収穫の時は旧約聖書においても(イザ 18:5; エレ 51:33; ホセ 6:11; ヨエ 4:13)、新約聖書においても(マタ 13:30, 39-43; 黙 14:14-20を参照)終末の裁きの象徴となることが多い³⁶。しかし、豊かな収穫を神の祝福のしるしと見なす伝統や(創 26:12; レビ 25:21)、刈り入れによる収穫の喜びを語る表象も旧約聖書には存在している(詩 126:5-6)。「刈り入れの譬え」における刈り入れのイメージも、宣教活動によって回心者が得られることに関して用いられており、神の国の救いのメタファーとなっている(マタ 9:37-38; ルカ 10:2; ヨハ 4:35-36)³⁷。

「父親への願いの譬え」(ルカ 11:11-12)はマタ 7:9-10に並行箇所があり、Q資料に由来する語録である³⁸。ルカはこの譬えを祈り求めることを勧める勧告(11:9-13)の一環として、祈りについての弟子たちへの教えの中に置いている(ルカ 11:1-13)。他方、マタイはこの譬えを山上の説教(マタ 5:3-7:27)の後半部に置いており、説教を聴いた者が一心に祈り求めることを勧める勧告(7:7-

11)の一部としている。ルカ版の語録においてもマタイ版においてもこの譬えに先立って、祈り求めることを勧める格言が置かれている(ルカ 11:9-10; マタ 7:7-8)。譬えは「あなた方の内の父親の誰が・・・だろうか?」という修辭的疑問文によって提示され、聴衆に自分自身のこととして考えるように促している(ルカ 11:11-12; マタ 7:9-10)³⁹。マタイ版の譬えとルカ版の譬えは、「パンに代えて石」(マタ 7:9)が、「卵に代えてさそり」(ルカ 11:12)に変わっている点と、神が与える「良いもの」(マタ 7:11)が「聖霊」(ルカ 11:13)に変わっている点で異なっている。

譬えの後には、人間の父親が天の父なる神のメタファーであることを示す解釈句が置かれ(ルカ 11:13; マタ 7:11を参照)、父親が子供に良いものを与えるように、天の父である神は祈り求める者に決して有害なものを与えることなく、良いものを与えて下さることが格言風の言葉によって強調される⁴⁰。ここには、小から大へ(a minore ad maius)の推論の手法が使用されている⁴¹。この推論は修辭学の推論法にも(クウィンティリアヌス『弁論家の教育』5.10.87)⁴²、ラビ的議論法にも(『ミシュナ』「アボート」1.5)合致する。

この格言(ルカ 11:9-10)と譬え(11:11-13)は既にQ資料の段階で結合していた(マタ 7:7-11を参照)。Q教団は既にこのイエスの語録を願うことを遠慮せず神に祈り求めることの譬えと解釈しており、それを福音書記者たちが継承したことが分かる。尚、父親が子に求められて与える可能性として挙げられている良いもの(魚、パン、卵)と悪しきもの(蛇、石、さそり)の対照は極端であり、非常に奇抜な譬えとして、聞いた者は決して忘れることが出来ない強い印象を受けたと考えられる⁴³。

「灯りと燭台の譬え」(ルカ 11:33)はマタ 5:15に並行箇所があり、Q資料に由来する語録である⁴⁴。この語録はマコ 4:21; ルカ 8:16; トマ福 33にも並行伝承が見られるので、広い範囲で流布したことを示している。マタイは弟子たちを光と呼ぶメタファーとこの譬えを結合し、人々の前で光を

輝かす勧めを語っているが(マタ 5:14-16)、ルカはこの譬えと「体の灯りの譬え」(ルカ 11:34-35)を並べて引用し、灯りに関する語群を形成している。この語録は火を点した灯りは隠れたところに置くのではなく、よく見えるように燭台の上に置く生活習慣を前提にしているが、「灯り」は「異邦人の啓示の光」(2:32)であるイエスへの信仰に根ざした人生を象徴し、「灯りを燭台の上に置く」とは人々の間でイエスへの信仰を持っていることを隠さず、明らかにすることを指している(ルカ 8:16-17を参照)。

「体の灯りの譬え」(ルカ 11:34-35)はマタ 6:22-23に並行箇所があり、Q資料に由来する語録である⁴⁵。「目は体の灯りである」という言葉は(マタ 6:22; ルカ 11:34)、目という器官が体の中で視覚を受け持っていることから、体全体を明るくする「灯り」と同視している(詩 38[37]:11; 箴 15:30; ダニ 10:6; トビ 10:5; 11:14; エチ・エノ 106:2を参照)。この語録は当時の世界に流布していた身体論を反映しているような印象を受ける(プラトン『国家』6.508Bを参照)⁴⁶。この譬えは、目が体の中で光を受け入れて物を見る機能を持つ器官であることから発展して、目が体全体を明るくする「灯り」であるとしている(詩 38[37]:11; 箴 15:30; エチ・エノ 106:2; フィロン『アブラハム』156を参照)。Q資料はこの章句を倫理的勧告として使用しているが、光はしばしば真理を象徴するので(ヨハ 1:4-5, 9; 8:12; 9:5; 12:35を参照)、目は光である真理を認識し、相応しい歩みを導き出す能力のメタファーとなっている(ヨハ 11:10; エフェ 1:18を参照)⁴⁷。

地上ではなく、「天に富を積む譬え」は(ルカ 12:33)、富を得るために奮闘するよりも、神の御心に従って財産を売って貧しい者に与える施しをすることを勧めている(ルカ 11:41; 使 4:37を参照)。この譬えはマタ 6:20にも出て来ており、Q資料に由来する⁴⁸。初期ユダヤ教文献の倫理的勧告において、「天に富を積む」という表現が神の御心に従って貧しい者のために施しをすることを指して用いられていることが多い(トビ 4:9-11;

IV エズ 6:5; シラ 29:10-13)。本語録において、「天に富を積む」ことが神の御心に従った善き業である施しを行うことのメタファーになっていることは福音書の読者には明らかである⁴⁹。

「辛子種の譬え」(ルカ 13:18-19)にはマタ 13:31-32に並行箇所があり、Q資料から採られた言葉であると判定できる⁵⁰。この譬えにはマコ 4:30-32とトマ福 20:96に並行伝承が見られ、マタイはマルコとQ両方の伝承を組み合わせた話を伝えている。この語録においてイエスは、「神の国は何に似ているのだろうか? 何に譬えようか?」という二重の修辭的疑問文で話を始め(ルカ 13:18)、直ちに、「辛子種に似ている」という回答を自ら与え(ルカ 13:19a; マタ 13:31)、それに続く副文でその理由を説明する(ルカ 13:19b; マタ 13:31b-32)。聴衆はこの出だしによって譬え話の主題が神の国であることを意識し、後半の本体部分では語り手と共に蒔かれた辛子種の成長過程を思い浮かべるように促されている。Qに含まれる譬えの中で、明示的に神の国に言及するのは、「辛子種の譬え」「パン種の譬え」だけである。

この譬えは、辛子という植物は種の時は非常に小さいのに、蒔かれて成長すると大きな木と同様に枝が張って鳥が宿る程になることを述べて、地上における神の国の進展の不思議を強調している⁵¹。この譬えは不思議な自然現象を取り上げて、神の国が人為的営みを超えて進展することを語るメタファーとしている⁵²。旧約聖書において木陰に動物が住み、樹上に鳥が巣を作ることが出来るような木の存在は、地上の国の繁栄のメタファーとなる一方で(エゼ 17:22-24; 31:6; ダニ 4:9, 18を参照)、被造物を養う創造主としての神の業のメタファーにもなっていた(詩 104[103]:12, 16-17を参照)。イエスはこの良く知られたイメージを辛子種の驚異的な成長に結び付けて神の国の進展の形容に援用したのである。

「パン種の譬え」(ルカ 13:20-21)にはマタ 13:33に並行箇所があり(トマ福 96も参照)、Q資料から採られた言葉であると判定できる⁵³。ルカの文脈では、この譬えは直前に置かれている「辛子種

の譬え」(ルカ 13:18-19) と一体をなしている。この語録の語り方は、「辛子種の譬え」(ルカ 13:18-19) に似ている。イエスは、「神の国は何に似ているのだろうか?」という修辭的疑問文で話を始め(ルカ 13:20)、直ちに、「パン種に似ている」という回答を自ら与え(ルカ 13:21a; マタ 13:33a)、それに続く副文でその理由を説明する(ルカ 13:21b; マタ 13:33b)。副文はパン種を取って大量の小麦粉に混ぜて埋め込むと全体が発酵して膨らむことを指摘しているが、少量のパン種が小麦から作ったこね粉を膨らます発酵現象の不思議が(1コリ 5:6; ガラ 5:9 も参照)、人知を超えた神の国の成長のメタファーとなっている⁵⁴。「パン種(ζύμη)」は新約聖書においては、人の倫理的資質を損なう利己的な心の在り方の象徴として使用されることが多いが(マコ 8:15; ルカ 12:1; 1コリ 5:6; ガラ 5:9)、ここではそのような否定的意味は込められていない。

3. ルカ福音書における譬え話

ルカ福音書においてストーリー性を備えた譬え話はすべてイエスの発言の中に出て来る(ルカ 7:41-42; 10:30-37; 12:16-21; 12:39-40; 12:42-48; 13:6-9; 13:24-27; 14:15-24; 14:28-30; 14:31-33; 15:4-7; 15:8-10; 15:11-32; 16:19-31; 18:1-8; 18:9-14; 19:11-27)。ここでは、個々の譬え話を採り上げてその修辭的・神学的特色について考察することとする。

ルカ固有の語録である「負債免除の譬え話」(ルカ 7:41-42) は、ファリサイ派のシモンの家で行われた晩餐の際に、罪の女性がイエスの足を涙で濡らして自分の髪でそれを拭い、香油を注いだ出来事に付随して語られている(7:36-40を参照)。その時、イエスはシモンに、「ある金貸しに借金している二人の人がいて、一人が500デナリ、他が50デナリ借りているとする。二人共返済できないので、返済を免除してあげたとすれば、どちらが彼を多く愛するであろうか?」と問い掛け、シモンは「より多く免除された者と思います」と答えている(7:41-42)。この譬え話は、その女性を罪人として見下すシモンの心を見抜いたイエス

が、その誤りを彼に自覚させるために語ったという設定になっている。イエスは後に、罪の女性に対してその罪を赦し、「あなたの信仰があなたを救った。平安のうちに行きなさい」と言って送り出している(7:48, 50)。この譬え話においては負債を負うことが、罪を犯して罪責を負うことの、負債を免除することが罪を赦すことのメタファーとなっているが、そのことは譬え話の登場人物の間でも、福音書の読者にも自明の前提となっている⁵⁵。神に対して負う罪責は返さなければならない負債であり、罪の赦しは借金の免除に等しいとするメタファーは、主の祈りの第五祈願にも用いられており、初代教会の人々にはお馴染みであった(マタ 6:12; ルカ 11:4; デイダケー 8:2を参照)⁵⁶。

「善いサマリア人の譬え話」(ルカ 10:30-37) は、イエスと弟子たちがエルサレムに旅を続ける旅の記事の中に置かれている(9:51-19:27)。この譬え話に先んじて、旧約聖書の戒めを巡るイエスと律法学者の対話がなされている。永遠のいのちを得る道について律法学者の問いがイエスに向けられ、それに対するイエスの反問に答えて、彼は全身全霊で神を愛することを勧める申 6:5 と隣人愛を勧めるレビ 19:18 の言葉を引用する(ルカ 10:25-27)。イエスはこの答えに同意し、それを実践することを勧めると、律法学者は、「私の隣人とは誰のことですか?」と反問した(10:28-29)。この問いに対してイエスが与えた答えが、「善いサマリア人の譬え話」(10:30-37) である。イエスの言葉には、「・・・のようなものである」という導入句や(6:48, 49; 7:31, 32; 12:36; 13:18, 19, 21)、「何に譬えようか?」(7:31; 13:18, 20) といった定型句は伴っていないが、隣人愛の本質を示す例証(παράδειγμα) として語られた譬え話であることは文脈上明らかである⁵⁷。

物語はエルサレムからエリコへ向かう道を舞台にしている。旅の途上に追いはぎに襲われた人があり、半殺しの状態で道端に倒れている(10:30)。そこに三人の人が次々に通りかかる。最初に祭司が通りかかるが、見て見ぬふりをして通り過ぎる

(10:31)。次に、レビ人が通りかかるが祭司と同様に救助せずに通り過ぎる(10:32)。最後に、サムリア人が通りかかり、その人を見ると「憐れんで」その人を救助して、油と葡萄酒を傷口に注いで手当てをした後にロバに乗せて宿屋に連れて行き、介護した(10:33-34)。次の日に、用事のために宿屋を出るときには、主人にお金を渡して介抱してくれるように頼んだ(10:35)。譬え話を語った後にイエスは律法学者に対して、「あなたはこの三人のうちの誰が追いはぎに襲われた人の隣人となったと考えるか?」とその意味を問う(10:36)。この問いは、律法学者の誰が隣人なのかという問いに対する(10:29)、視点をずらした反問となっている。ここでは、「誰が隣人なのか」ではなく、「誰が隣人となったか」が問題となっている⁵⁸。律法学者は譬えの趣旨を理解して、「その人を助けた人です」と答えている。この譬え話は、隣人愛の戒めの意味を理解させるために作られた例話として機能している⁵⁹。

「真夜中の客の譬え話」(ルカ 11:5-8)には共観福音書に並行箇所がなく、ルカ固有の伝承に由来する⁶⁰。この譬え話は、τίς ἐξ ὑμῶν (「あなたたちの内の誰が・・・だろうか?」)という常套句で始まっている(ルカ 11:5; さらに、ルカ 11:11; 14:28; 15:4; 17:7も参照)。この句は修辭的疑問文であり、聴き手の注意を引くと共に、譬えられていることが彼ら自身に関わることであることを認識させようとしている。話の内容は友人関係に関するものである。真夜中に友達が訪れて来たので、自分の友達のところに行ってもてなすための食物を分けて貰うように頼む(11:5-6)。その友は既に戸は閉めており、子供たちが寝ていることを理由に断ろうとするが(11:7)、諦めずに執拗に頼めば必要なものを分けてくれるであろうと述べられる(11:8)。

この譬え話は祈ることについてイエスが弟子たちを教える文脈に置かれており(11:1)、祈るべき内容を示す「主の祈り」(11:2-4)の直後に出て来ている。この譬え話の直ぐ後には、祈りが聞かれるまで、天の父にたゆまず祈り求めることを説

く勧めの言葉が続いている(11:9-13)。福音書記者ルカはこの譬えを「不正な裁判官の譬え」(18:2-8)と同様に、直ぐには聞かれなくてもいいが、諦めずに神に祈り求め続けると必ず聞かれ、与えられることを例証する言葉と解釈している⁶¹。

「愚かな金持ちの譬え話」(ルカ 12:16-21)には共観福音書には並行箇所がなく、ルカ特有資料に由来する(トマ福 63に並行伝承が見られる)。群衆の一人が、「私にも遺産を分けてくれるように兄弟に言って下さい」と言う(12:13)、イエスは自分が裁判官や調停人ではないと前置きした後に、人間のいのちは財産によって保証されるものではないから、貪欲に注意するようにと述べた後に(12:14-15)、その例証としてこの譬え話を語っている(12:16-21)⁶²。ある金持ちがいて豊作の年が訪れた時に、倉を建て直して大きくして採れた穀物や資産を蓄えておけば、この先何年も安泰だと心の中で思った(12:16-19)⁶³。ところが、ここで神が突然登場してこの金持ちを「愚か者」と呼び、その夜にもいのちが取り去られると、「財産は誰のものになるのか」と問いかけた(12:20)。この話は遺産相続を巡る争いの原因である人間の所有欲の根底に、地上の富を積むことを通して自分のいのちを確保しようとすることがあると考え、そうした試みの空しさを示そうとしている(セネカ『書簡集』1014を参照)。

この譬え話が語られる前提として、人間のいのちは創造主なる神の手にあり、それを左右することは出来ないという知恵文学的な認識がある(コへ 8:8; 知 15:8; ヤコ 4:14-15)。「神は与え、また取り給う」のである(ヨブ 1:21)。人間は思い煩っても自分のいのちを延ばすことは出来ない(マタ 6:27; ルカ 6:25)。財産をため込んでも自分のいのちを延ばすことは出来ず(ルカ 12:15)、その夜にもいのちが取り去られるということが起こりかねない(12:20)。人間は死後の世界にまで財産を持って行くことは出来ず、それは誰か他の人間のものになる運命にある。このことは既に詩 49:17-18やシラ 11:18-19が指摘しており、知恵文学の

伝統では一つの確立した認識となっている（ヤコ4:13-15も参照）⁶⁴。結論のところではイエスは、「自分のために富を積んでも、神の前に豊かでないものはこの通りである」と宣言しているが、これは福音書記者が加えた解釈句であろう（12:21）⁶⁵。この譬え話の結末は結局のところ、神の御心を行って、天に宝を積んで「神の前に豊かになる」ことを勧めているとルカは解釈したのである（マタ6:19-21; ルカ12:33-34; Iテモ6:18を参照）⁶⁶。

「泥棒の襲来の譬え話」（ルカ12:39-40）にはマタ24:43-44に並行箇所があり、Q資料から採られている⁶⁷。泥棒の襲来の譬えの並行伝承はトマス福音書や（トマ福21; 103）、パウロ書簡や（Iテサ5:2, 4）、共同書簡や（IIペト3:10）、黙示録（黙3:3; 16:15）にも見られ、終末への備えを勧める言葉として初代教会に広く流布していたことが伺われる。

この譬え話は、「次のことを弁えていなさい」という導入句で始まる（ルカ12:39a）。譬え話の本体部分は、家の主人は泥棒がいつ来るか分かっていたら、家に押し入ることを許さないことを確認する（ルカ12:39b）。この譬え話の結びの句（ルカ12:40）は解釈句であり、泥棒の到来と同様に終末時における人の子の来臨が予告なしに起こるという認識に立って、何時来ても良いように常に備えているように勧めている（Iテサ5:2, 4; IIペト3:10; 黙3:3; 16:15を参照）。

「忠実で賢い管理人の譬え話」は（ルカ12:42-48）、マタ24:45-51に並行箇所があり、話の本体部分（ルカ12:42-46）はQ資料から採録されている⁶⁸。この譬え話は、主が来臨する時が遅延していることを前提に、終末期待が弛緩し、管理人の職務を託されている僕が慢心に陥って職務を怠り、他の僕たちに対して非倫理的な振る舞いをして構わないといった思いを起こすことを戒め（12:45の独白を参照）、忠実に職務を果たすことを勧めている⁶⁹。この譬え話は終末の遅延の問題に直面していた教会に由来するものであろう。ここでは問題になっているのは、主人の財産の管理を託された管理人であるので、教会の指導者たち

の慢心に対する警告として語られている（ルカ12:41を参照）⁷⁰。教会における指導者たちの責任はキリスト教が運動体の段階であったQ資料の段階に置いても既に意識されていたが、より組織化が進んだルカ文書の教会では、彼らは大牧者であるキリストから教会の群れを率いる役割を託された牧者として（使20:28; Iペト5:2を参照）、忠実に誠意を持って群れの世話をする役割を果たすことが求められていたのである。

「実らないイチジクの木の話」（13:6-9）はルカ福音書に固有であり、他の福音書には見られない。この譬え話は導入句なしに始まり、本体部分が直ぐに述べられる。ある人が自分の葡萄園にイチジクの木を植えておき、3年後に実を採るために見に来たが（13:6; さらに、レビ19:23も参照）、実は見当たらなかったため園庭に切り倒したいという希望を告げる（13:6-7）。園丁は木の周りを掘って肥料をやるか来年末まで待ち、それでも実を結ばないなら切り倒すように願う（13:8-9）。神を葡萄園の所有者に、イスラエルを葡萄園に譬える習慣は旧約聖書に遡るが（イザ5:1-3を参照）、イスラエルの民をイチジクの木に譬える文学的伝統もある（エレ8:13; 24:5-7; 29:17; ホセ9:10）。特に、実を付けることのないイチジクは、イスラエルの不信仰の象徴ともなっている（エレ8:13; ミカ7:1; ハバ3:17）。こうした旧約聖書の文学的伝統を踏まえると、この譬え話が神を葡萄園の所有者に、イエスを園丁に、イスラエルをイチジクの木に譬えているのは明らかである⁷¹。イチジクの木が実を結ぶとはこの場合は福音を聞いてイスラエルが回心すること、つまり、宣教活動が成果を挙げることを指している。実を結ばない木を切り倒すことは終末の裁きの象徴であろう（マタ3:10; ルカ3:9; ヨハ15:2-8を参照）。今までのイスラエルに対する宣教活動は十分に成果を挙げることはなかったが、イエスの執り成しによって猶予期間が与えられたので、もう暫く経ってから切り倒すかが決定されることになる（ルカ13:8）⁷²。

「狭い戸口から入る譬え話」（ルカ13:24-27）に

はマタ 7:13-14 に並行箇所があり、Q 資料から採られた言葉である⁷³。両者の文言はかなり異なっており、マタイ版の譬えが、簡潔な格言風の語録であるのに対して、ルカ版の譬え話は物語性を伴う問答の形式を採っている。マタイ版の譬え話は、狭い門から入るのか、広い門から入るのか生き方の選択の問題を提示しているのに対して、ルカ版の譬え話は、戸口が閉められてからは、懇願しても入れてもらえなくなるから、早く入ろうと努力するように勧め、迅速な行動を起こす必要性を強調している。この場合、戸口は神の国の入り口を象徴している（創 28:17; 黙 4:1）⁷⁴。戸を開けて入れるかどうか判断する家の主人は神を表しているであろう（マタ 7:7-8; ルカ 11:10 を参照）。戸口が狭いことは誰でも入れる訳ではないことを表しており、神の国の福音を聞いて信じる者だけが救われることを示唆している⁷⁵。

「盛大な祝宴の譬え話」（ルカ 14:16b-24）はマタ 22:1-10 に並行箇所がある（トマス福 64 にも遠い並行箇所がある）⁷⁶。両者の箇所はかなり相違しているので、原本の文言を正確に復元することは困難であるが、話の核は Q 資料に由来すると考えられる⁷⁷。ルカ版の話では、この譬え話は、「幸いです、神の国で食事をする人は」という食事を共にしている客の一人の発言に対する応答として語られている（ルカ 14:15-16a）。尚、14:24 はルカが付け加えた編集句であり、導入句の 14:15 と呼応して、譬え話を枠付け、囲い込んでいる。

譬え話によると、ある人が大規模な宴会を開くことを企画し、多くの人を招く（14:16b）。宴会の準備が出来ると、その人は僕を送って、富裕な招待客たちを呼びにやったが、彼らは色々な生活上の事柄を理由に来ようとはしなかった（14:17-20）。そこで家の主人は僕に、町の広場や大通りに出て行って、「貧しい者、体の不自由な者、目の見えない者、足の不自由な者」を連れて来なさいと命じた（14:21）。僕は言われた通りに行くが、それでも宴会に席の余裕があることを報告する（14:22）。主人は通りや小道に出て行って、無理にでも連れてくるように命じた上で（14:23）、

「あなた方に言うが、あの招かれた者たちの中で私の食事を味わう者は一人もいない」と述べる（14:24）。

究極の救いを神の国の食事に譬えることは旧約聖書とユダヤ教黙示文学に由来するイメージであり（イザ 25:6-8; 55:1-2; 65:13-14; エチ・エノ 62:14）、確立した初代教会の伝統となっている（マタ 26:29; ルカ 13:29; 16:22; 22:16, 18, 30; 黙 3:20; 19:9）⁷⁸。他方、この譬え話における再度の招待の記述は（14:21）、イエスの宣教において語られた、「目の見えない人が見え、足の不自由な者が歩き、重い皮膚病を患う者が清くされ、耳が聞こえない者が聞こえ、死者が甦り、貧しい者が福音を聞いている」という言葉に対応している（ルカ 7:22; さらに 4:18 を参照）⁷⁹。この譬え話は、イエスの福音がイスラエルの社会の主流を担う人々ではなく、疎外された弱い立場の中にある人たちの間で受け入れられている現状を説明している⁸⁰。また、会場を満たすために三度目の招待を発することは、ユダヤ人の拒否によって救いへの招きは異邦人に及んだことを示唆している（使 13:46-48 を参照）⁸¹。この譬えは、教会の福音宣教の歴史を振り返り、救済史的展望の中においている⁸²。

「塔の建設の譬え話」（ルカ 14:28-30）と「進軍の譬え話」（14:31-32）には共観福音書の並行箇所がなく、ルカ特殊資料に由来する。二つの譬え話は一対をなしており、イエスに付いてくる群衆に向かって語られている（14:25, 33）。弟子たる者は自分の家族や自分のいのち以上にイエスを尊重し、「自分の十字架を背負って付いて来る者でなければ」イエスの弟子にはなれないという厳しい言葉が語られた後に（14:25-28）、弟子となる心構えの例証として二つの譬えが語られ、「同じように、あなた方の内で自分の持ち物をすべて捨てる者でなければ、誰一人として私の弟子にはなれない」という言葉で結ばれている（14:33）。

「塔の建設の譬え話」においてイエスは、「あなたたちの内の誰が・・・だろうか？」という修辭的疑問文を用いて語り始めている（14:28）。通常の弁論において質問は争点についての事実確認の

ためになされる（クウィンティリアヌス『弁論家の教育』3.11.1-4）⁸³。これに対して、イエスが用いる修辭的疑問文は譬えられていることが自明の事実であることを聴き手に意識させ、彼らを譬え話の世界に参加させようとしている（ルカ 11:5, 11; 12:25; 14:4 を参照）⁸⁴。「塔の建設の譬え話」では、塔を建設する者は建設にかかる費用をしっかりと計算した上で、建設に取り掛かることを強調し（14:28-29）、「進軍の譬え話」では王が戦いを始める前に自分と敵方の兵力を比較し、相手の方が優っている場合は、戦争よりも和平を求めるとしている（14:31-32）。両者の譬え話は、当時の社会状況の中でイエスの弟子となり、信仰を貫くためには大きな代価を支払わなければならないことを予め自覚するように促している⁸⁵。

ルカ福音書 15 章には三つの譬え話が記されている（ルカ 15:3-7; 15:8-10; 15:11-32）。これらの譬え話は、イエスの話を聞こうとして徴税人や罪人が近寄って来たことに対して、ファリサイ派や律法学者たちが眩き、「この人は罪人たちを迎えて食事を一緒にしている」と言ったことに答えてイエスが語ったという設定になっている（ルカ 15:1-3）。譬えの機能を修辭学は論証手段の一つである例証（*παράδειγμα*）であるとしているが（アリストテレス『弁論術』1393a-b）、ここでは三つ譬え話が、イエスの振る舞いが正当であることを立証する弁明（*ἀπολογία*）の機能を果たしている⁸⁶。

ルカ 15:4-7 に「失われた羊の譬え話」が引用されているが、この箇所にはマタ 18:12-14 に並行箇所があり（トマ福 107 も参照）、Q 資料から採用されていることが分かる⁸⁷。ルカ版の譬え話においてイエスは、「あなたたちの内の誰が・・・しないだろうか？」という修辭的疑問文を用いて語り始めている（15:4）。この句は聴き手の同意を当然の前提としており、彼らに譬えられていることが身近なことであることを意識させ、譬え話の世界に参加させようとしている（ルカ 11:11; 12:25; 14:4, 28 を参照）⁸⁸。譬え話によると、ある羊飼いが羊を 100 匹飼っていて放牧中に 1 匹がい

なくなってしまった時に、99 匹を荒野に残していなくなった 1 匹を探す。ルカ版の話については特に羊飼いの喜びを強調する脚色がなされており、羊飼いは羊を見つけたら喜んでその羊を肩に担いで家に帰り、友達や隣人と共に喜びを分かち合う（15:5-6）。譬えの最後に福音書記者によって挿入された解釈句があり、「あなた方に言うておくが、悔い改める罪人については、悔い改める必要のない 99 人の義人に対してよりも大きな喜びが天にある」と宣言する（15:7）⁸⁹。失われた羊に象徴される罪人が、15 章の冒頭に出て来る徴税人や罪人たちのことを念頭に置いていることと、失われていない 99 匹羊に象徴される義人たちが、ファリサイ派や律法学者たちのことを言っていることは、文脈上明らかである（15:1-2 を参照）⁹⁰。羊が悔い改めることはないが、羊飼いが連れて帰る結果、本来の場所に立ち返る結果となっているので、悔い改めて神に立ち返った罪人の象徴となっている⁹¹。この譬え話は徴税人や罪人たちを受け入れて食事さえ共にしているイエスの振る舞いが、罪人の悔い改めることを喜ぶ神の御心に適っていることを示し、ファリサイ派や律法学者たちのクレームを斥けている（ルカ 5:29-32 を参照）⁹²。

旧約聖書の伝統では、しばしば神が羊飼いに、イスラエルの民が羊の群れに譬えられる（詩 23:1-6; 74:1; 78:52; 79:13; 80:2; 95:7; 100:3; 119:176; イザ 40:11; 53:6; エレ 23:1-4; エゼ 34:11-31）。神は羊の世話をし、羊を導いて牧草や泉へと連れて行く（詩 23:1-6; 78:52; 100:3; イザ 40:11; 49:9-10; 53:6; エレ 23:1-4）。羊は迷い易くので（詩 119:176; イザ 53:6; エゼ 34:4）、羊飼いである神が散り散りになった羊を探し出し連れ戻す譬えもある（エゼ 34:11-31）⁹³。エゼキエル書の文脈では、バビロン捕囚によって世界に離散したイスラエルを神が再び集める希望を語っているが、イエスはこのイメージを罪人を捜し求め、福音宣教によって悔い改めに導いて神の国に連れ帰る神の業に重ねている⁹⁴。この譬え話のメッセージは明らかであり、非常に有効な論証となっている。

「無くした硬貨の譬え話」(ルカ 15:8-10)には並行箇所がなく、ルカ特殊資料に由来する言葉伝承である。ある女性が持っていた10ドラクマの銀貨のうち一つを無くしたが、彼女はそれを見つけるまで徹底的に探す(15:8)。見つけたら、彼女は友達と近所の人々を集めて一緒に喜ぶ(15:9)⁹⁵。イエスは、「あなた方に言うておくが、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある」と宣言する(15:10)。話のポイントは失われたもの(罪人)を探し求める神の愛と喜びである⁹⁶。それは失われた羊の譬え(15:4-7)の場合と似ているが、結びに置かれた福音書記者の解釈句には罪人と義人の対照がなく、専ら罪人の悔い改めの主題に焦点が当てられている。譬え話に出て来る銀貨自体が悔い改めることはないが、女性が見付けて本来の場所に戻す結果となっているので、悔い改めて神に立ち返った罪人の象徴となっているのであろう⁹⁷。

「放蕩息子の譬え話」(ルカ 15:11-32)はルカ特殊資料に由来する長大な譬え話であり、非常に劇的な内容を持っている⁹⁸。譬え話には父親と二人の息子が登場する。財産を死後に相続する慣習(民 27:8-11; 申 21:15-17)に反して、弟の方が父の生前に財産分与を申し入れ(シラ 33:20を参照)、それを換金して遠い国へ行って放蕩の末に財産を使い果たしてしまう(15:12-15)。しかし、後に困窮して彼は我に返り、父のところに戻って行くことを決意するが、その心中の思いは独白として読者に開示される(15:17-19)。父は帰って来た息子を憐れみ(15:20)、息子の謝罪の言葉を聞き(15:21)、最上の歓迎をして祝宴を設けた(15:22-24)。この歓迎に兄が不満を持ち、寛大な父の対応に不平を言うが(15:25-30)、父親は、「お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなったのに見つかったのだ。祝宴を設けて楽しみ喜ぶのは当然ではないか」と言って斥ける(15:31-32)。この譬え話において、寛容な父親が神を、放蕩息子が徴税人や罪人たちを、不平を言った兄がファリサイ派や律法学者たちを指していることは明らかである⁹⁹。そのために、先行する二つの

譬え話には見られた解釈句が(15:7, 10を参照)、この譬え話には付けられていないが、この話も徴税人や罪人たちを受け入れて一緒に食事さえているイエスの振る舞いへの批判に反論し、神の御心に適っていることを示すために語られている¹⁰⁰。そうすると、イエスの振る舞い自身が旧約聖書の預言者の象徴行動のように(例えば、エレ 16:1-8; 32:6-15を参照)、失われた者に対する神の愛のメタファーとなっている。イエスの振る舞いと言葉(譬え話)がメタファーとして呼応し合っていることになる¹⁰¹。

「不正な管理人の譬え話」(16:1-8)はルカ特殊資料から採られており、他の福音書に並行箇所はない。ある金持ちがいて、その財産の管理を一人の管理人に任せていた(16:1a)。管理人が管理財産を浪費しているという情報があったので、主人は彼を呼び出して、会計報告をするように求め、解雇することを申し渡した(16:1b-2)。管理人は解雇に備えて自分に好意を持つ者を作るために、主人に負債がある者たちの証文を書き換え、負債を軽減してやった(16:5-7)。その間の管理人の心の動きは、その独白によって読者に開示されている(16:3-4を参照)。主人はこの不正な管理人のずる賢いやり方を賞めて、「この世の子らは光の子らよりも自分たちの仲間に対して賢い」と言っている(16:8)¹⁰²。尚、弟子たちに不正な富で友達を作るように勧める言葉(16:9)は、イエスが語った本来の譬え話の一部ではなく、二次的に付加された解釈句である¹⁰³。

不正行為をした管理人が賞められる内容は譬え話を聞く者を戸惑わせる。この話は信徒たちに一体何を教えようとしているのだろうか? 信徒たちは「光の子ら」の方に分類されており(ヨハ 12:36; エフェ 5:8; Iテサ 5:5; 死海文書『共同体の規則』1.9; 2.16; 3.13, 24, 25; 『戦いの巻物』1.3, 9, 11, 13を参照)、「この世の子ら」(『ダマスコ文書』20.34を参照)ではないので、同じような不正をするように勧められているのではない¹⁰⁴。しかし、彼らもこの世に生きている以上は、「この世の子ら」との折衝は避けられない。アイロニーを込め

て過ぎ去るべきこの世にはこのようなずる賢さが賞賛されることもあることを示して、「鳩のように直く、蛇のように賢く」(マタ 13:16) この世を生きるように促しているのであろうか¹⁰⁵。

「金持ちと貧者ラザロの譬え話」(ルカ 16:19-31) もルカに固有な譬え話であり、並行箇所は存在しない。この話には金持ちと貧者のラザロが出て来る。金持ちは地上の生活において贅沢な暮らしをしていたが、ラザロは貧しく金持ちの家の食卓からこぼれた食物で飢えを満たしたいと思い、その門の前に横たわっていた(16:19-20)。しかし、両者の死後の運命は逆であり、ラザロの方は天上でアブラハムの宴席に連れて行かれたのに対して、金持ちは陰府で苦しむことになる(16:22-23)。金持ちが天上のアブラハムに窮状を訴えるとアブラハムは、地上で良い暮らしをしていた者は死後の世界では苦しみ、生前に苦しい暮らしをしていた者は死後の世界では良い生活をして慰められるという内容のことを告げる(16:25-26)。さらに、金持ちはアブラハムにラザロを5人の兄弟のところへ使わして、このような目に遭わないように言い聞かせてくれるように頼む(16:27-28)。アブラハムはその願いを断り、モーセと預言者に聞くように勧める(16:29, 31)。この譬え話は一つの例話であり、死後の運命が、地上の運命とは逆になり、今、貧困にあえぐ者は、天国では豊かさに預かり、地上の生涯において富を享受した者は、陰府で苦しむことになることを告げている。神の国における運命の逆転の主題は、マリアの讃歌(1:46-55)や、平野の説教冒頭の幸いと呪いの宣言(6:20-26)に出て来ており、ルカ福音書の基本的な姿勢を示している。この譬え話のポイントは、富める者たちに悔い改めて神の御心を行い、聖書に聴きつつ貧者に配慮した生活を行うように警告することにある(16:29-31)¹⁰⁶。

「やもめと不正な裁判官の譬え話」(18:2-8a) もルカ特殊資料に由来し、他の福音書に並行箇所はない¹⁰⁷。この譬え話は現在の文脈では、語り手による導入の言葉が示すように(18:1)、失望せず神に祈り続けることを勧める例話として語られて

いる(11:5-8; 21:36も参照)¹⁰⁸。話に登場する裁判官は、傲慢で「神を畏れず、人と人とも思わない」人物である(18:4)¹⁰⁹。しかし、彼は一人のやもめが執拗に訴えるので、その願いを聞いてやることにするが、その心の動きは独白によって読者に開示される(18:2-5)。不正な裁判官でさえ執拗に頼めば聞いてくれるのだから、「神は日夜祈り続ける選ばれた者たちに対して裁きを行わず、彼らを放っておくことがあるだろうか?」という修辭的疑問文で話は締め括られる(18:7-8a)。ここでは、修辭学の推論法にも(クウインティリアヌス『弁論家の教育』5.10.87)、ラビ的議論法にも(『ミシュナ』「アポート」1.5)用いられている「小から大へ(a minore ad maius)の推論」の手法が使用されている¹¹⁰。不正な裁判官と神を対照した上でたゆまず祈願し続けるように勧めることは、奇抜な語り方であるように見受けられる。聖書において神が裁判官に譬えられる際には、その裁きは常に義しいとされる一方で(詩7:12; 9:5, 8-9; 50:6; 96:13; 97:2; 98:9; 99:4; 119:75; ロマ3:26)、神は孤児とやもめの権利を擁護する方とされていたからである(申10:17-18; シラ35:17-19)。

「ファリサイ派と徴税人の祈りの譬え話」(18:10-14a)もルカ固有の例話であり、並行箇所はない¹¹¹。話にはファリサイ派と徴税人の二人が登場し、祈りを捧げる。ここでは、修辭学的には、人物創出(προσωποποιία, *fictio personae*)と(クウインティリアヌス『弁論家の教育』9.2.29-30)、対比(σύγκρισις, *comparatio*)の手法(『弁論家の教育』8.4.9-14)を用いて、祈りに関する二つの対照的な態度が提示されている¹¹²。ルカ福音書において二人は祈るためにエルサレムの神殿に出かけ、それぞれ祈りを捧げる。ファリサイ派は当時の社会の中で特に律法を厳格に守るグループとして知られていた(ヨセフス『ユダヤ古代誌』13.297-298; 18.15)。ファリサイ派の男は心の中で、自分が倫理的に正しく、敬虔な生活を送っている者であることを誇り、徴税人のような者でないことを神に感謝している(18:10-12)。このような敬虔さを

誇り、神に感謝する祈りは、ラビ文献にも見られるが（『バビロニア・タルムード』「ベラホート」28b）¹¹³、ここでは修辭的効果を挙げるために人物像がかなり誇張されている。これとは対照的に、徴税人は遠くに立ってうつむいて胸を打ちながら、「神よ、罪人の私を憐れみ下さい」と懺悔の祈りを捧げた（ルカ 18:13）。神の前で義とされて帰宅したのは、ファリサイ派ではなく、徴税人の方であった（ルカ 18:14a）。「神は打ち砕かれた霊、悔い改めた心を侮ることはない」からである（詩 51:19; 138:6 を参照）。ルカが付け加えた編集句によれば、イエスはこの譬え話を自分が義人であると自負し、他人を見下している人々への警告として語っており（ルカ 18:9）、「誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高くされる」という格言で締め括っている（18:14b; さらに、マタ 23:12; ルカ 1:51-52; 14:11; ヤコ 4:10; I ペト 5:6 を参照）¹¹⁴。この結論は聴き手である弟子たちに対して、信仰生活において敬虔さを誇って自己義認に陥ることを戒め、自分の罪を認めて神の前にへりくだることを勧めている¹¹⁵。

「ムナの譬え話」（ルカ 19:12-27）はマタ 25:14-30 に並行箇所があり（マコ 13:34 にも遠い並行伝承がある）、話の輪郭は似ているので恐らく Q 資料から採られているのであろうが、細部はかなり相違している¹¹⁶。ルカ版の話ではある身分の高い人が王位を受けるために遠くに旅に出るときに、10 人の僕たちを呼んでそれぞれに 1 ムナ（＝合計 10 ムナ）のお金を託した（19:12-13）。時が経過して主人が帰って来た時に、清算が行われて、託された金額で 10 ムナの利益を得た僕と 5 ムナの利益を得た者たちは賞賛され、それぞれ 10 の町と 5 つの町の支配権を与えられた（19:16-19）。しかし、1 ムナの金を布に包んでとっておいた僕は叱られ、託された金を取り上げられ、10 ムナを持っている僕に与えられた（19:20-24）。既に彼は既に 10 ムナを持っていると言う僕たちの指摘に対して、主人は「あなたたちに言うが、持っている者はさらに与えられ、持たない者は持っているものまで取り上げられる」と言って苦情を斥

けている（19:26）。この話では、託されたムナは単に守るだけでは不十分で、それを活用して収益を上げることが要求されているが、主人の帰還は、終わりの時におけるキリストの来臨を象徴し、清算は終末の裁きを意味しているのであろう（使 17:31; I コリ 3:12-15 を参照）¹¹⁷。遠くの国に旅して用事を終えて帰って来るには時間がかかるので、この譬え話は終末の時の到来までにある程度の時間が経過することを前提にしている（ルカ 19:11 を参照）¹¹⁸。僕たちが託されたムナを活用して金儲けをすることは、終末の到来以前の時に信徒として神の御心になかった積極的な生き方をすることを意味しているのであろう¹¹⁹。この譬えでは主人は王位を受けるために遠くに旅立っているが（19:12）、それはローマ支配下のパレスチナではヘロデ家の君主が王位を安堵して貰うために、ローマまで出かけて皇帝に謁見することが必要であった事情を反映している（ヨセフス『古代誌』14.379-389）。王位を受けないように国民の一部が代表を送って工作したために（19:14）、王位を与えられて帰還した王から報復されたことも（19:27）、ヘロデ王の死後に起こった、息子のアルケラオスの王位継承をめぐる歴史的記憶の反映であろう（ヨセフス『古代誌』17.299-320）¹²⁰。

5. まとめと展望

ルカ福音書の釈義的研究から、ルカ福音書中の譬えについて、次のことが確認できる。

- (1) ルカ福音書冒頭の降誕物語の叙述部分には、詩文で書かれたイスラエル人の預言や讚美の歌が記されている（ルカ 1:67-79「ザカリアの預言」; 1:29-32「シメオンの讚歌」）。これらの詩文において、到来するイエスは、「救いの角」（1:68）、「高いところからの曙光」（1:78b-79）、「諸国民への啓示の光」と呼ばれる（2:32）。これらの譬えは詩的メタファーであり、旧約聖書のイザヤ書のメシア預言の表現を借用しながら（イザ 9:1; 60:1）、イエス・キリストの到来の意味を明らかにしてい

- る。
- (2) ルカ福音書においてイエスの譬え話はしばしば聴き手への問いによって始っている。例えば、「・・・のようなものである」という句や（ルカ 6:48, 49; 7:31, 32; 12:36; 13:18, 19, 21）、「何に譬えようか？」という句が（ルカ 7:31; 13:18, 20）、譬え話の冒頭に置かれている。これらの句は譬えという文学形式の本質が比較と類比にあることを示している。他方、譬え話が「あなたたちの内の誰が・・・だろうか？」という句で始まる場合もある（ルカ 11:5; さらに、ルカ 11:11; 12:25; 14:4; 15:4 も参照）。この句は修辭的疑問文であり、聴き手の注意を引くと共に、譬えられていることが彼ら自身に関わることを強く認識させようとしている。
- (3) ルカ特殊資料より引用されている譬え話には、登場人物の独白が記されている場合がある（ルカ 12:17-19; 15:17-19; 16:3-4; 18:4-5; 18:11-12 を参照）。独白の挿入は登場人物の行動の内的動機を読者に明らかにし、強く印象付ける修辭的効果を持っている。また、内面を描写することによって、語られる物語を読者が登場人物と共に内側から眺める機会を与えることになる。このような文学的手法を駆使することは、ルカが自覚的な物語作者であることを示している。
- (4) 譬え話の最後に付加された解釈句は、福音書記者の編集によるものであるが、そこにはイエスの譬えを倫理的に解釈する傾向が見られ、読者に譬えを実践し、その教訓を実践するように求めている。例えば、「愚かな金持ちの譬え話」（ルカ 12:16-21）の結論のところ、ルカは、「自分のために富を積んでも、神の前に豊かでないものはこの通りである」（12:21）という言葉を付け加えて地上ではなく、天に富を積むような生き方を勧めている。また、「ファリサイ派と徴税人の祈りの譬え話」（18:9-14）の締め括りにルカは、「誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高

くされる」という格言を置き（18:14b）。信仰生活において自己義認に陥ることを戒め、神の前にへりくだることを勧めている。

- (5) ルカ福音書に出て来る譬え話には、信徒が実践すべき理念を物語を通して表現する例話（Beispielerszählung）が含まれている（ルカ 10:30-37; 12:6-21; 16:19-31; 18:9-14）。例えば、「善いサマリア人の譬え話」（ルカ 10:30-37）は、隣人愛の本質を示す例話である。「ファリサイ派と徴税人の祈りの譬え話」（18:9-14）は、二つの対照的な人物像を通して、自己義認と神の前の謙遜という対照的な心の在り方を説明している。

注

- 1 B. Heining, *Metaphorik, Erzählstruktur und szenisch-dramatische Gestaltung in den Sondergutgleichnissen bei Lukas* (Münster: Aschendorff, 1991), 3-5, 12-13.
- 2 原口尚彰「神の国のメタファー：マルコによる福音書における喩えの文学的・神学的機能」『ルーテル学院研究紀要』第 56 号、2023 年、1-14 頁を参照。
- 3 OED 11:177; A. Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu* (zwei Teile; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1910), 1:70; C. H. Dodd, *The Parables of the Kingdom* (New York: Charles Scribner's Sons, 1936), 16; R. Funk, "Das Gleichnis als Metapher," in W. Harnisch ed., *Die neutestamentliche Gleichnisforschung im Horizont von Hermeneutik und Literaturwissenschaft* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982), 20; A. J. Hultgren, *The Parables of Jesus: A Commentary* (Grand Rapids: Eerdmans, 2000), 3.
- 4 W. Harnisch, *Die Gleichnisserzählungen Jesu* (3. unveränderte Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1995), 63-64; R. Zimmermann, *Parabeln in der Bibel. Die Sinnwelten der Gleichnisse Jesu entdecken* (Gütersloh: Gütersloher Verlaghaus, 2023), 75.
- 5 R. Funk, "Das Gleichnis als Metapher," in Harnisch ed., *Die neutestamentliche Gleichnisforschung*, 29-31, 33; P. Ricoeur, "Biblische Hermeneutik," *ibid.*, 283, 288, 294-295, 314; E. Jüngel, "Das Evangelium als analoge Rede von Gott," *ibid.*, 355-356; G. Sellin, "Allegorie und 'Gleichnis'," *ibid.*, 374-374, 408-409.

- 6 この名詞の語学的分析については、Bauer-Aland, 1238-1239; F. Hauck, “παροβολή,” *TWNT* 5:741-749; G. Haufe, “παροβολή,” *EWNT* 3:35-38; Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:25-33; R. Brucker, “Zur Verwendung von παροβολή in der Septuagint,” in J. Schröter / K. Schwarz / S. Al-Saudi eds., *Jesu Gleichnisse und Parabeln in der frühchristlichen Literatur: Methodische Konzepte, religiohistorische Kontexte, theologische Deutungen* (WUNT 456; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2021), 31-42; Zimmermann, *Parabeln in der Bibel*, 93-95 を参照。
- 7 H. Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern* (FRLANT 120; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978), 121. n.117.
- 8 J. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke* (2 vols; AB28, 28A; New York: Doubleday, 1979-1985), 1:383, 388; J. Nolland, *Luke* (3 Vols; WBC 35A-C; Dallas: Word, 1989-1993), 1:86; D. L. Bock, *Luke* (2 Vols; Grand Rapids: Baker, 1996), 1:180-181; F. Bovon, *Lukasevangelium* (EKK III/1-4; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1989-2009), 1:104-105; H. Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK I/3; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2006), 123, 126; M. Wolter, *Das Lukasevangelium* (HNT5; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2009), 113; D. E. Garland, *Luke* (ECNT3; Grand Rapids: Zondervan, 2011), 107; 嶺重淑 [NTJ 新約聖書注解 ルカ福音書]、日本キリスト教団、2018 年、1:81, 84 頁; 同『ルカ神学の探究』教文館、2012 年、46 頁。
- 9 Fitzmyer, *Luke*, 1:428; Nolland, *Luke*, 1:120; Bock, *Luke*, 1:244-245; Bovon, *Lukasevangelium*, 1:145; Klein, *Lukasevangelium*, 148; Wolter, *Lukasevangelium*, 140; Garland, *Luke*, 136; 嶺重『ルカ福音書』、1:107-108 頁; 同『探究』、71 頁を参照。
- 10 J. M. Robinson et al., *The Critical Edition of Q* (Minneapolis: Fortress, 2000), 8-13; D. T. Roth, *The Parables in Q* (LNTS582; London: T & T Clark, 2018), 55-66; 山田耕太『Q 文書 訳文とテキスト・注解・修辞学的研究』教文館、2018 年、20-21 頁を参照。
- 11 Roth, *The Parables in Q*, 62-64; Nolland, *Luke*, 1:148.
- 12 Roth, *The Parables in Q*, 59-60; Bock, *Luke*, 1:306-308; Klein, *Lukasevangelium*, 165; Wolter, *Lukasevangelium*, 160; 山田耕太『Q 文書における洗礼者ヨハネに関する説教の修辞学的分析』日本聖書学研究所編『聖書学論集 46 聖書の宗教とその周辺』リトン、2014 年、384 頁; 嶺重『ルカ福音書』、1:137 頁を参照。
- 13 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 16-17; Roth, *The Parables in Q*, 66-77; 山田耕太『Q 文書』、20-21 頁を参照。
- 14 J. Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu* (3. durchgesehene Auflage; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1954), 98; Roth, *The Parables in Q*, 71-72, 74-75; 嶺重『ルカ福音書』、1:141 頁を参照。
- 15 Fitzmyer, *Luke*, 1:535; Bock, *Luke*, 1:416; Bovon, *Lukasevangelium*, 1:214; Klein, *Lukasevangelium*, 190; 嶺重『ルカ福音書』、1:177 頁を参照。
- 16 Klein, *Lukasevangelium*, 191; Wolter, *Lukasevangelium*, 196; E. Esch-Wermeling, “Kein Heimvorteil für den Heiler Lk 4,23,” in R. Zimmermann ed., *Kompendium der Gleichnisse Jesu* (2. korrigierte und um Literatur ergänzte Auflage; Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 2015), 526-527.
- 17 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 76-77; Roth, *The Parables in Q*, 190-197; 山田『Q 文書』、30-31 頁を参照。
- 18 Roth, *The Parables in Q*, 194; Klein, *Lukasevangelium*, 263; 嶺重『ルカ福音書』、1:290 頁を参照。
- 19 Bovon, *Lukasevangelium*, 1:334-335; G. Kern, “Absturzgefahr (Vom Blinden als Blindenführer): Q 6,39 (Mt 15,14 / Lk 6,39 / EvThom 34),” in Zimmermann ed., *Kompendium*, 63-65; Roth, *The Parables in Q*, 190.
- 20 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 80-83; Roth, *The Parables in Q*, 352-361; 山田『Q 文書』、30-31 頁を参照。
- 21 J. Leonhardt-Baltzer, “Die Behebung einer Sehschwäche (Vom Splitter und dem Balken): Q 6,41f. (Mt 7,3-5 / Lk 6,41f. / EvThom 26),” in Zimmermann ed., *Kompendium*, 76-77, 79; Roth, *The Parables in Q*, 358; Fitzmyer, *Luke*, 642; Bovon, *Lukasevangelium*, 1:332.
- 22 Nolland, *Luke*, 1:307-308; Bock, *Luke*, 1:613-614; Klein, *Lukasevangelium*, 264; Wolter, *Lukasevangelium*, 263; 嶺重『ルカ福音書』、1:291 頁を参照。
- 23 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 86-87; Roth, *The Parables in Q*, 238-245; 山田『Q 文書』、171-174 頁を参照。
- 24 Roth, *The Parables in Q*, 243-245; 山田『Q 文書』、173 頁を参照。
- 25 Fitzmyer, *Luke*, 1:643; Bock, *Luke*, 1:616; 嶺重『ルカ福音書』、1:292 頁を参照。

- 26 Klein, *Lukasevangelium*, 264; D. Starnitze, "Von den Früchten und dem Sprechen des Herzens (Vom Baum und seinen Früchten): Q 6,43-45 (Mt 7,16-20 / Lk 6,43-45 / EvThom 45)," in Zimmerman ed., *Kompendium*, 85-86; Roth, *The Parables in Q*, 245.
- 27 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 97-101; Roth, *The Parables in Q*, 286-296; 山田『Q 文書』、30-31 頁を参照。
- 28 Bovon, *Lukasevangelium*, 1:341-343; Klein, *Lukasevangelium*, 267; Wolter, *Lukasevangelium*, 265; Hultgren, *The Parables*, 136; M. Mayordomo, "Einstürzende Neubauten (Hausbau auf Felsen oder Sand). Q 6,47-49 (Mt 7,24-27 / Lk 6,47-49)," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 92-93, 96; Roth, *The Parables in Q*, 293 を参照。
- 29 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 140-143; Roth, *The Parables in Q*, 146-164; 山田『Q 文書』、42-43 頁を参照。
- 30 P. Müller, "Vom misslingenden Spiel (Von den spielenden Kindern): Q 7,31-35 (Mt 11,16-19 / Lk 7,31-35)," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 100.
- 31 Bovon, *Lukasevangelium*, 1:380-381; Nolland, *Luke*, 1:344-345; Wolter, *Lukasevangelium*, 286-287; Roth, *The Parables in Q*, 149; 嶺重『ルカ福音書』、1:326-327 頁を参照。
- 32 Wolter, *Lukasevangelium*, 288; Roth, *The Parables in Q*, 156-164.
- 33 Q 資料に由来する「灯火の譬え」の並行伝承はルカ 11:33(マタ 5:15 を参照)に引用されている。
- 34 Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 86; Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 144; Fitzmyer, *Luke*, 1:718; Bock, *Luke*, 1:744-745; Bovon, *Lukasevangelium*, 1:415-416; Klein, *Lukasevangelium*, 310; Garland, *Luke*, 346.
- 35 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 160-161; Roth, *The Parables in Q*, 274-286; 山田『Q 文書』、46-47 頁を参照。
- 36 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 119; Scott, *Hear then the Parable*, 369-370; Hultgren, *The Parables*, 388; Klein, *Lukasevangelium*, 376 n.39; Dormeyer, "Mut zur Selbst-Entlastung," 319-320, 322-323; Roth, *The Parables in Q*, 282; 山田『Q 文書』、201 頁を参照。
- 37 Fitzmyer, *Luke*, 2:846; Nolland, *Luke*, 2:550-551; Bovon, *Lukasevangelium*, 2:50; A. Dettwiler, "Das Gleichnis von der selbstwachsenden Saat," in J. Frey / E. M. Jonas eds., *Gleichnisse verstehen. Ein Gespräch mit Hans Weder*, BTS 175 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2018), 80, 86-87.
- 38 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 218-219; Roth, *The Parables in Q*, 361-374; 山田『Q 文書』、60-61 頁を参照。
- 39 Roth, *The Parables in Q*, 365.
- 40 Roth, *The Parables in Q*, 366; Fitzmyer, *Luke*, 2:914; Nolland, *Luke*, 2:631-632.
- 41 Bock, *Luke*, 2:1061-1062; Wolter, *Lukasevangelium*, 414; Roth, *The Parables in Q*, 372.
- 42 H. Lausberg, *Handbuch der literarischen Rhetorik* (4. Aufl.; Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 2008), § 397 を参照。
- 43 Bovon, *Lukasevangelium*, 2:155.
- 44 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 256-257; Roth, *The Parables in Q*, 265-273; 山田『Q 文書』、68-69 頁を参照。
- 45 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 258-261; 山田『Q 文書』、68-69 頁を参照。
- 46 E. E. Popkes, "Das Auge als Lampe des Körpers (Vom Auge als des Leibes Licht): Q 11,34f. (Mt 6,22f. / Lk 11,34-36 / EvTom 24)," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 140-141.
- 47 Ibid., 141; Fitzmyer, *Luke*, 2:539-540; Nolland, *Luke*, 2:657; Bock, *Luke*, 2:1100-1101.
- 48 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 328-331; 山田『Q 文書』、84-85 頁を参照。
- 49 H. D. Betz, *The Sermon on the Mount* (Minneapolis: Fortress, 1995), 433-435; Klein, *Lukasevangelium*, 457; Garland, *Luke*, 519 を参照。
- 50 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 400-403; Roth, *The Parables in Q*, 298-312; 山田『Q 文書』、96-97 頁を参照。
- 51 E. Rau, *Reden in Vollmacht: Hintergrund, Form und Anliegen der Gleichnisse Jesu* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1990), 152-154; G. Gäbel, "Mehr Hoffnung wagen (Vom Senfkorn): Mk 4,30-32 (Q 13,18f. / Mt 13,31f. / Lk 13,18f. / EvThom 20)," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 330, 332-333; Snodgrass, *Stories with Intent*, 222; Roth, *The Parables in Q*, 303; Bock, *Luke*, 2:1225-1226; Klein, *Lukasevangelium*, 483-484.
- 52 Bovon, *Lukasevangelium*, 2:415; Garland, *Luke*, 550; Scott, *Hear then the Parable*, 387; Gäbel, "Mehr Hoffnung wagen (Vom Senfkorn)," 333-334; M. Labahn, "Das Reich Gottes und seine performativen Abbildungen," in Zimmermann ed., *Hermeneutik*, 268; Fitzmyer, *Luke*, 2:1016.
- 53 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 404-405; Roth, *The Parables in Q*, 312-327; 山田『Q 文書』、

- 96-97 頁を参照。
- 54 Bovon, *Lukasevangelium*, 2:420; Klein, *Lukasevangelium*, 484-485; Wolter, *Lukasevangelium*, 488; Garland, *Luke*, 551; Rau, *Reden in Vollmacht*, 119; K.-H. Ostemeyer, "Gott knetet nicht (Vom Sauertaig): Q13,20f. (Mt 13,33 / Lk 13,20f. /EvThom 96)," in Zimmermann ed., *Kompendium*,188; Roth, *The Parables in Q*, 322; Fitzmyer, *Luke*, 1018-1019.
- 55 Fitzmyer, *Luke*, 1:687; Notland, *Luke*, 1:356.
- 56 Betz, *The Sermon on the Mount*, 400-404 を参照。
- 57 Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:114; 2:585-586; E. Jüngel, *Paulus und Jesus* (4. Aufl.; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1972), 169-174; Fitzmyer, *Luke*, 2:883; Bovon, *Lukasevangelium*, 2:88; Wolter, *Lukasevangelium*, 395; Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 271; Heininger, *Metaphorik*, 81; Hultgren, *The Parables*, 92, 94; Zimmermann, *Parabel in der Bibel*, 297-298, 305.
- 58 Jüngel, *Paulus und Jesus*, 170; Fitzmyer, *Luke*, 2:884, 888; Nolland, *Luke*, 2:586; Bock, *Luke*, 2:1018, 1034; Bovon, *Lukasevangelium*, 2:88; Wolter, *Lukasevangelium*, 397; Garland, *Luke*, 445; Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 291; Zimmermann, *Parabeln in der Bibel*, 314-315; 嶺重『探究』、214-215 頁を参照。
- 59 Heininger, *Metaphorik*, 24-25; Fitzmyer, *Luke*, 2:883; Bock, *Luke*, 2:1035.
- 60 E. Jüngel, *Paulus und Jesus* (4. Aufl.; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1972), 155; Hultgren, *The Parables*, 227.
- 61 Jüngel, *Paulus und Jesus*, 156-157; Fitzmyer, *Luke*, 2:910; Bock, *Luke*, 2:1060; Bovon, *Lukasevangelium*, 2:146-147; Heininger, *Metaphorik*, 100-101; C. Kähler, *Jesu Gleichnisse als Poesie und Therapie. Versuch eines integrativen Zugangs zum kommunikativen Aspekt von Gleichnissen Jesu* (WUNT 78; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1995), 108-109; Hultgren, *The Parables*, 232-233.
- 62 Fitzmyer, *Luke*, 2:971; Bovon, *Lukasevangelium*, 2:273, 286.
- 63 Heininger, *Metaphorik*, 32-37, 77-82; Rau, *Reden in Vollmacht*, 87-88; P. Sellew, "Interior Monologue as a Narrative Device in the Parables of Luke," *JBL* 111 (1992):239-253; Bovon, *Lukasevangelium*, 2:282; Klein, *Lukasevangelium*, 443 は、ルカが譬え話中の登場人物の独白という文学的手法を用いて人間の行動動機を開示し、読者に対する修辭的效果を挙げようとしていることに着目する。
- 64 Heininger, *Metaphorik*, 41-42; Bovon, *Lukasevangelium*, 2:286-287; Hultgren, *The Parables of Jesus: A Commentary*, 105 を参照。
- 65 Heininger, *Metaphorik*, 110; Fitzmyer, *Luke*, 2:972; Bovon, *Lukasevangelium*, 2:273; C. W. Hedrick, *Parables as Poetic Fictions: The Creative Voice of Jesus* (Peabody, MA: Hendrickson,1994), 143.
- 66 Bovon, *Lukasevangelium*, 2:287-288; Garland, *Luke*, 517.
- 67 Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 360-363; Roth, *The Parables in Q*, 164-187; 山田『Q 文書』、86-87 頁を参照。
- 68 Robinson /Hoffmann / Kloppenborg eds., *The Critical Edition of Q*, 400-403; Roth, *The Parables in Q*, 298-312; Christine Gerber, "Es ist stets höchste Zeit (Vom treuen und untreuen Haushalter) : Q12,42-46," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 161-170; 山田『Q 文書』、88-89 頁を参照。
- 69 Klein, *Lukasevangelium*, 464.
- 70 Fitzmyer, *Luke*, 2:986, 989; Bovon, *Lukasevangelium*, 333-334; Gerber, "Es ist stets höchste Zeit," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 167.
- 71 Heininger, *Metaphorik*, 129.
- 72 Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 129; Fitzmyer, *Luke*, 2:1005; Nolland, *Luke*, 2:719; Bock, *Luke*, 2:1210; Garland, *Luke*, 540-541; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 244-246 を参照。
- 73 James M. Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 406-413; 山田『Q 文書』、98-99 頁を参照。
- 74 Fitzmyer, *Luke*, 2:1022, 1025; Wolter, *Lukasevangelium*, 491; Dirk Jonas, "Tretet ein! (Von der verschlossenen Tür): Q 13,24-27 (Mt 7,22f.; 25:10-12 / Lk 13,24-27)," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 193.
- 75 Jonas, "Tretet ein!," 196; Bock, *Luke*, 2:1234-1235; Bovon, *Lukasevangelium*, 2:434.
- 76 外典福音書のトマス福音書の語録 64 にも遠い並行箇所がある。
- 77 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 177-178; Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 432-449; Roth, *The Parables in Q*, 128-143; L. Schottroff, "Von der Schwierigkeiten zu teilen (Das große Abendmahl): Lk 14,12-24 (EvThom 64)," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 593; 山田『Q 文書』、272-275 頁を参照。
- 78 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 188; Bock, *Luke*, 2:1271-1272; Bovon, *Lukasevangelium*,

- 2:508; Schottruff, "Von der Schwierigkeiten zu teilen," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 598; Roth, *The Parables in Q*, 141.
- 79 Hultgren, *The Parables of Jesus*, 337 を参照。
- 80 Kähler, *Jesu Gleichnisse als Poesie und Therapie*, 129-130; Fitzmyer, *Luke*, 1053-1054; Bovon, *Lukasevangelium*, 2:512-513; Labahn, "Das Reich Gottes und seine performativen Abbildungen," 269.
- 81 Kähler, *Jesu Gleichnisse als Poesie und Therapie*, 130; Fitzmyer, *Luke*, 2:1053; Bock, *Luke*, 2:1277; Bovon, *Lukasevangelium*, 2:513; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 338; Roth, *The Parables in Q*, 139, 142-143 を参照。
- 82 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 192; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 337 を参照。
- 83 Lausberg, *Handbuch*, § 81-90.
- 84 Bovon, *Lukasevangelium*, 2:537-538; G. Sellin, "Die Kosten der Nachfolge (Das Doppelgleichnis vom Turnbau und vom Krieg): Lk 14,28-32," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 607.
- 85 Fitzmyer, *Luke*, 2:1062; Klein, *Lukasevangelium*, 315; Wolter, *Lukasevangelium*, 518-519; Erlemann, *Fenster zum Himmel*, 106; Sellin, "Die Kosten der Nachfolge," 605.
- 86 Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 226; Heininger, *Metaphorik*, 145; Nolland, *Luke*, 2:769; Bock, *Luke*, 2:1299; Bovon, *Lukasevangelium*, 3:15; Klein, *Lukasevangelium*, 523; A. Merz, "Last und Freude des Kehrens (Von der verlorenen Drachme): Lk 15,8-10," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 610.
- 87 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 170; Robinson et al., *The Critical Edition of Q*, 478-483; Zimmermann, *Parabeln in der Bibel*, 206, 224; 山田『Q 文書』、279-281 頁を参照。
- 88 Wolter, *Lukasevangelium*, 524-525; Zimmermann, *Parabeln in der Bibel*, 208-209.
- 89 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 169.
- 90 Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 227; Wolter, *Lukasevangelium*, 526; Zimmermann, *Parabeln in der Bibel*, 209-210.
- 91 Bock, *Luke*, 2:1302.
- 92 Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 110-111; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 174-175; Fitzmyer, *Luke*, 1075; Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 228-229; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 59-61; Synodgrass, *Stories with Intent*, 107; Zimmermann, *Parabeln in der Bibel*, 219-220 を参照。
- 93 Zimmermann, *Parabeln in der Bibel*, 215-217.
- 94 Bovon, *Lukasevangelium*, 3:27 n.58; Zimmermann, *Parabeln in der Bibel*, 218-219.
- 95 この部分は、恐らく福音書記者ルカによる脚色であろう(15:6 を参照)。
- 96 Fitzmyer, *Luke*, 2:1080; Bovon, *Lukasevangelium*, 3:33.
- 97 Nolland, *Luke*, 2:775; Kähler, *Jesu Gleichnisse als Poesie und Therapie*, 115-116; Merz, "Last und Freude des Kehrens," 616; Erlemann, *Fenster zum Himmel*, 108.
- 98 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 252-254.
- 99 Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 108; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 260-262; Fitzmyer, *Luke*, 2:1085; Rau, *Reden in Vollmacht*, 199-201, 210, 212; Heininger, *Metaphorik*, 29, 161-166; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 81, 86-87; Merz, "Last und Freude des Kehrens," 629 を参照。
- 100 Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 106, 115-116; Nolland, *Luke*, 2:780; Bock, *Luke*, 2:1306; Wolter, *Lukasevangelium*, 541-542; Merz, "Last und Freude des Kehrens," 631.
- 101 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 275-276; Fitzmyer, *Luke*, 2:1086; Nolland, *Luke*, 2:781; C. Münch, "Der erzählte Erzähler: Jesu Gleichnisse in den synoptischen Evangelien," in J. Schröter / K. Schwarz / S. Al-Saudi eds., *Jesu Gleichnisse und Parabeln in der frühchristlichen Literatur*, 127.
- 102 ルカ 16:9-13 の語録は二次的な拡張部分であり、本来の譬え話には属していない。この点については、Klein, *Lukasevangelium*, 537 を参照。
- 103 Bovon, *Lukasevangelium*, 2:73.
- 104 Klein, *Lukasevangelium*, 541-542 を参照。文字通り不正をすることを勧めているという L. Thurén, *Parables Unplugged: Reading the Lukan Parables in their Rhetorical Context* (Minneapolis: Fortress, 2014), 114-115, 120-122 の解釈に反対する。
- 105 Fitzmyer, *Luke*, 2:1098-1099; Bovon, *Lukasevangelium*, 3:79; S. Porter, "The Parable of the Unjust Steward (Luke 16:1-13): Irony is the Key," in ed. D. J. A. Clines, *The Bible in Three Dimensions* (Sheffield: JSOT, 1990), 127-153; Tim Schramm / Kathrin Löwenstein, *Unmoralische Helden: Anstößige Gleichnisse Jesu* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1986), 20-21 を参照。
- 106 Heininger, *Metaphorik*, 190-191; Fitzmyer, *Luke*, 2:1127; Bovon, *Lukasevangelium*, 3:112-113;

- Hultgren, *The Parables of Jesus*, 115-116; J. Leonhardt-Balzer, "Wie kommt ein Reicher in Abrahams Schoß? (Vom reichen Mann und armen Lazarus): Lk 16,19-31," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 657-658 を参照。
- 107 ルカ 18:1 と 18:8b は福音書記者により挿入された編集句であり、元々の譬え話には含まれていない。この点については、Fitzmyer, *Luke*, 2:1076; Bovon, *Lukasevangelium*, 3:188; Kähler, *Jesu Gleichnisse als Poesie und Therapie*, 152 を参照。
- 108 Heininger, *Metaphorik*, 207-208; Nolland, *Luke*, 2:866, 871; Bock, *Luke*, 2:1446-1447; Bovon, *Lukasevangelium*, 3:186, 189-190; Klein, *Lukasevangelium*, 577; Wolter, *Lukasevangelium*, 586; Erlemann, *Fenster zum Himmel*, 127; idem., *Gleichnisse*, 206, 209, 211; Annette Merz, "Die Stärke der Schwachen (Von der bittenden Witwe): Lk 18,1-8," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 668.
- 109 そのような人物がイスラエルの指導者の中に見られたことは、ヨセフス『古代誌』10.83 を参照。
- 110 Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 119; Heininger, *Metaphorik*, 206; Bock, *Luke*, 2:1450; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 258; Wolter, *Lukasevangelium*, 414; Roth, *The Parables in Q*, 372; Erlemann, *Fenster zum Himmel*, 127; idem., *Gleichnisse*, 209; Merz, "Die Stärke der Schwachen," 670-671 を参照。
- 111 ルカ 18:9 は福音書記者により挿入された編集句であり、読者に譬え話を解釈する視点を与えている。Kähler, *Jesu Gleichnisse als Poesie und Therapie*, 191; Heininger, *Metaphorik*, 199; T. Popp, "Die Werbung in eigener Sache (Vom Pharisäer und Zöllner): Lk 18,9-14," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 681, 687 を参照。
- 112 Bock, *Luke*, 2:1458; Wolter, *Lukasevangelium*, 592.
- 113 Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 116.
- 114 Hedrick, *Parables as Poetic Fictions*, 2090 を参照。
- 115 Linnemann, *Gleichnisse Jesu*, 61-62; Fitzmyer, *Luke*, 2:1184-1185; Bock, *Luke*, 2:1461; Bovon, *Lukasevangelium*, 3:204; Heininger, *Metaphorik*, 218; Kähler, *Jesu Gleichnisse als Poesie und Therapie*, 209-210; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 120; Popp, "Die Werbung in eigener Sache," 690-693 を参照。
- 116 両者は別の話であるとする見解も当然出て来る。この立場については、Hultgren, *The Parables of Jesus*, 283-284 を参照。
- 117 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 146; Fitzmyer, *Luke*, 2:1232-1233; Klein, *Lukasevangelium*, 608; Wolter, *Lukasevangelium*, 620, 624-625; C. Münch, "Gewinnen oder Verlieren (Von den anvertrauten Geldern): Q19,12f.15-24.26," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 246-247, 249-250; Roth, *The Parables in Q*, 126-127.
- 118 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 147; Bovon, *Lukasevangelium*, 3:292-293; Münch, "Gewinnen oder Verlieren," 240.
- 119 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 209; Münch, "Gewinnen oder Verlieren," 250.
- 120 Fitzmyer, *Luke*, 2:1235; Nolland, *Luke*, 3: 914; Bock, *Luke*, 2:1525-1526, 1534-1535; Bovon, *Lukasevangelium*, 3:293; Klein, *Lukasevangelium*, 609; Wolter, *Lukasevangelium*, 620, 624; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 285; Münch, "Gewinnen oder Verlieren," 252 を参照。

Words Proclaiming the Love of God: The Rhetorical and Theological Functions of the Parables in the Gospel of Luke

Takaaki Haraguchi

In the Gospel of Luke, Jesus begins his parables with questions to his audience (Luke 11:5; 12:25, 36; 13:18, 19, 20; 14:4; 15:4 etc.). These are rhetorical questions calling attention to the parables and making them aware of the fact that the subject matter is directly related to them.

The evangelist Luke tends to impress the audience by emphasizing the emotions of the characters. In the case of the parable of the Lost Sheep, the joy of the shepherd who has discovered the lost sheep is depicted with exaggeration (Luke 15:5-6). In the parable of the Lost Coin, the joy of the woman who has recovered the lost coin is described in detail (Luke 15:8-9).

Some parables of Jesus in the Gospel of Luke such as “the parable of the Good Samaritan” (Luke 10:30-37) are classified as ‘example stories’ which show Christian ideas by telling the fictional stories (10:30-37; 12:6-21; 16:19-31; 18:9-14).

Keywords: parable, Jesus, Luke, questions, example stories

